
満月にエメラルド 続編

花畑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

満月にエメラルド 続編

【Nコード】

N0096Y

【作者名】

花畑

【あらすじ】

魔法の呪いで人形になった中世の騎士と、人形を買ったOLの話

同名短編はあれで一旦終わっているのですが、それを無理矢理続けてみたというのがこの続編になります。

1話完結の方は葉月が碧を忘れてる設定ですが、この続編では覚えている設定です。

趣味と妄想ばかりなのでご注意くださいませ。

こちらは続編となりますので、まずは1話完結の方を先にお読み頂

お待ちしております。よろしくお願い致します。m () m

今夜は満月だ。

「葉月さん、こんばんは」

窓から差す月光を浴びてこれでもかとキラキラ輝く中世ヨーロッパ貴族もどきの男。あるいは騎士。

満面の笑みで、心の底から嬉しそうに私の前でひざまづく。それから手の甲にキスをする。貴族の挨拶だって言うのは映画や本で見たことあるから分かるけど、実際にこういうことをされる機会って普通無いよね。普通じゃないからこういうことが起こっているんだけども。

「こんばんは。1ヶ月ぶり」

夢の中にいるようで、夢じゃない。

満月の夜、私のお気に入りの西洋人形は常識の範囲を越えた変貌を遂げる。

碧あおは、満月の一夜だけ人形から本物の人間になる。

というか、元々は人間だったみたいだから『戻る』って言った方が

正しいけれど。碧は何百年も昔、悪い魔女に人形にされてしまい、それ以来ずっと売買されて各国を転々と渡って来たのだそうだ。そして今は日本のただのOLが持ち主になったという訳。それが私。

「葉月さん、眠くはありませんか？今日はお仕事で長引いてらしたようです」

「ああ大丈夫だよ。帰ってくるのはちょっと遅かったけど、仕事の方は実はいつも通りに終わってたの」

今夜は一ヶ月ぶりに碧に会えるから早く家に帰りたかったのに、仕事を終えて帰る支度をしていると同僚に足止めを食らっていたのだ。

「そうでしたか。なら良かった。でも貴女に無理をさせてしまうのは僕の本意ではありませんから、葉月さんが眠くなったらお休みになって下さいね」

「全然眠くないよ、大丈夫。私これでも楽しみにしてたんだから最近買った電気ケトルでお湯を沸かし、ポットに二人分にしては多めの紅茶を作る。貧乏なせいで相変わらずティーパックだけど、私にしては結構良いものを買ったつもり。しばらく蒸らしてからカップに注いで一つを碧に渡す。碧は照れた様に笑った。

「ふふ、嬉しいです。葉月さんは優しいですね」

そんなことないよ、と私も笑って、他愛のない話をお互いに絶え間

なく話す。笑って、不思議がつて。碧は見た目クールな容姿なのに意外と喋り上手の聞き上手で、彼と話すのは本当に楽しかった。満月の一晩だけ彼とこうして話をする事は、私にとってここ最近で何よりの癒しとなっていた。

しかも、今回の満月はなんと都合の良いことに明日が休日なのだ。碧が人形に戻ってしまうその時間ぎりぎりまで彼と話が出来ると言うこと。明日の仕事をことを気にしなくてもいい。わーい！

私は2杯目の紅茶を注ぎながら、そういえばまだ肝心なことを聞いてないと思ってそれを聞いた。

「ねえ、どうしたら魔女の呪いを解くことが出来るの？」

「それは、その。…すごく難しくて」

「難しいのは付き物でしょ。やっぱりその魔女を倒すとかそういうのなの？」

「その手段は一つとしてあります。本来呪いをかけた術者を絶つ事はパソコンで言うところCPUを破壊する事でパソコンが呪い自体だとすると再起不能になりますよね、それから…」

「ちょっと待って例えばすごく現代！正直よく分からない」

「ああ、すみません。つい…」

『つい』って！軽く衝撃だった、見た目は大昔の西洋貴族or騎士の装いで口から出た言葉がCPU。なんという異空間。

「魔女を倒す事で呪いは消えます。しかしそれはある意味一時的なものなのです。魔女は馬鹿ではありませんから、命の予備を作っているものなのです。或いは後継者にその才知と魔力を過去の呪いごと丸々移すといった対策もしている筈です。CPUは交換すれば直ってしまいますよね、それが言いたかったんですが、つまりは費用対効果が少ないという点であまり有力ではないんです」

「そっかあ。そうなんだ」やっぱり分かりにくい。

「魔女自体も何処にいるのか、そもそも時代が時代です。まだ僕の呪いが解けていないということは魔女の力がまだ残っていると言うことではあります…」

「だけど、探すのが大変よね。他の解き方は？」

「それがその、また厄介で」

紅茶の湯気はすっかり消えている。

「呪いをかける時に魔女はある一つの“鍵穴”を作るんです。これにあう鍵、つまりある一つの条件を満たせば呪いは解ける様になっています」

「へえ…で、その条件っていつのは？」

「それが、分からないんです」

わあ、それは途方に暮れるよね。。

「本当にそれは、困った。貴方の途方もない気持ち、私なんかが想像出来る範囲を越えてる。碧、私変なこと言ってるかもだけど、今まですごく辛かったよね。私で良かったら何でも手伝うよ」

彼の一番華やかな時代であっただろう20代後半を、あわや人形にされてそのまま何百年も生き続けなければいけなかったのだ。酷い話なんて言うものじゃない。私だったら絶望のぞん底にいる。想像したら涙が出てきた。

碧は、どれだけ辛かったんだろう。寂しかったんだろう。

「あ、あの。葉月さん…」

「ああ、ごめん。お前が泣いても仕方ないだろうって話だよね」

「そんな、違いますっ！僕は…僕は嬉しいです」

椅子がフローリングを勢い良く擦る音がして、向かいに座っていた碧がこちらに身を乗り出してきたと思うと目の端に温かいものが触れた。

それは涙を拭う、碧のごつごつした指だった。

「…葉月さん。僕のせいですね。ごめんなさい」

心底申し訳なさそうに、眉を八の字に下げて謝る碧。
待って待って、何で碧が謝るの？私が勝手に泣いちゃっただけだといふのに。どこまで純粹なんだ。

「違うよ、ただ勝手に出てくるから…」

「貴女に涙を流してもらえるのは、僕は嬉しいです。でも僕のせいで貴方の笑顔が絶えるのは…嫌、なんです」

ちゅ、と小さく音を立てて、私の目尻に口付けた。

「!!!!!!??」

がたがたがたーん！

夜中だというのに、盛大に椅子から転げ落ちてしまった。これは明日確実に下の階の人から苦情が来るな、間違いない。

じゃなくて。

今のは…

今のはなに!?

「葉月さん！大丈夫ですか？」

「うはは、だいごうだいいいよ、やばいろねつがやられている

「ごめんなさい、僕調子乗りました。二度としませんから、どうか許して下さい…！いや、何か償いを…」

私を椅子から抱き起こしながら、さっきの八の字よりさらに鋭角寄りに眉を下げ涙目で謝る碧。わああ違うの、自分でもこんな少女みたいないな反応してしまった事にかなりびっくりしててそしてすごく超絶今恥ずかしいの！

「ゆ、許すも何も怒ってないよ、ちょっとびっくりしただけで…。それに償いなんてそんな大袈裟な」

「いいえ、無意識とはいえあるうことか恩人に不埒な行いを働いた罪は重い。こうして真夜中に未婚の女性と時を過ごしているという事もそもそも問題であるというのに僕は貴女の好意に甘えている立場です。どうか僕に罪を償わせて下さい」

貴族か騎士かどっちか分からなかったんだけど、これではつきりした。やっぱり碧は騎士だ。律儀な所と、今の私の足元に【ひざまずいている】仕草たるは騎士あるいはそれっぽい職業だったからなんだろう。とかぼんやり考えていたんだけどそれどころじゃない。

「えーっと、なんか大変な事になってしまったけど。ねえ、碧。頭上げて」

「葉月さん…」

「なら、約束して。私と一緒に貴方が元の人間に戻る方法を探すと」

「な、それは罰ではありません。それでは褒美です…」

「いいえ。これは罰です。私、自慢じゃないけど推理とか探し物とか大の苦手だから。私なんかよりもっとそういうの詳しい人に任せられるかもなのに、私と一緒にいなきゃいけないんだよ、何の拷問ってレベルだよ。さあ、呑む？呑まない？」

私は碧に手を差し出した。

同時に、なんか私ってズルいなって思った。

碧の事を思うと、今私が言ったようにもっと詳しくて良い人の元に行った方が近道だ。それを分かかって、私のワガママで碧を手元に置いておこうとしてるのだ。言い過ぎではなくこれは碧にとって不当な“罰”に他ならないだろう。

わかってるけど、でも。

「…だから、それが褒美だと言っているんです」

「え」

立ち上がった碧は、おもむろに私をその厚い胸板の中に抱き寄せた。

「すみません。また罪を重ねてしまいました。…罰を頂けますか？」

耳元に、熱い息がかかる。

さつきまでの八の字眉・涙目・犬耳（幻覚）はどこへやら、全然違った雰囲気^{（1）}に翻弄される。若干声も低い気がする。ついでに腕の力も強い。

「う、えと、きよ、今日はもう寝る……」

碧の尻尾が一気に頂垂れた気がしたが（幻覚）、これは仕方がない。びっくりしたんだもの、仕方ない。だって何故か身の危険を感じたから。

02 (後書き)

やっぱり続き書きたくて始めちゃいました。1話完結の方は、話的にミステリーな感じで終わらせたかったというのがありああった終わり方になっていますが、こっちはがつつり続きます！いやあのがつつりではないですけどね、ゆるーくですけどね！そんな感じでゆるーく見守って頂ければ嬉しいです！趣味と妄想全開になると思われます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0096y/>

満月にエメラルド 続編

2011年10月29日02時11分発行